正義と偽善の管理人

蓬莱の翁

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

管理者は言う。力を持ちすぎた者は人の道を外れて歩く

超能力や魔術の仕組みが判明した近未来、それを利用した犯罪も多くなってきた。

夜陰に紛れ今日も管理者は舞う。時に正義として、時に悪として

目次

1幕　管理人　1
2幕　一端　6
3幕　灼陽と霊月　17
幕間　休日　27
4幕　聖女　39
5幕　発端　52
6幕　泥梨　66

1幕　管理人

赤々と目に焼き付くような視界、実際に周囲は燃え盛る炎に包まれている。
顔を上げるので精一杯な程のダメージの中俺は目の前の背中に疑問と怒りを問いかける。
「き、教授!!・・・一体」
教授。そう呼ばれた長身の女性は振り返ることなく答える。静かに、しかし明確な感情を込めて。
「お前は、こちら側には来るなよ・・・」
そう言って彼女の姿は見えなくなった。痛みの奔流ととどろく爆発音に俺の意識は闇の底へ落ちていった。

「・・・っっ!!はぁ、はぁ、はぁ・・・」
目が覚めると同時に俺はベッドから跳ね起きた。着ていた服は絞れそうなほどに濡れている。あの夢を見た時の目覚めはいつもこうだ。

「嫌な夢だぜまったく・・・」
服を脱ぎ窓に近付きカーテンを開けると薄暗かった部屋に朝日が強烈に差し込んでくる。眩しさに目を細める。俺は、九鬼（くき）颯天（はやて）。そしてここは、太田学院の男子寮。
太田学院は、安桜（あさくら）市を望む高台に小中高はては大学のキャンパスまでを併設した東西2㎞。
南北3㎞の巨大な教育施設。敷地内に複数の学校や競技場、商業施設、研究所まで備えている。
「ドーヴラエウ―トラ！起きてるか颯天!!」
ノックと共に男の声が廊下に響く。この暑苦しい声は・・・
「起きてるよ、カギは空いてるから入っていいぞ」
「おーう。相変わらず散らかってるし陰気な部屋だなあ」
言うが早いか浅黒い肌の男が入ってきた。
彼は、二階堂（にかいどう）翔（かける）。俺と共に太田学園に編入してた認めたくはないが腐れ縁と言うやつだ。
１８０ｃｍを優に超える筋肉質な男だが、ただの運動馬鹿と言う訳でも無くロシア語とドイツ語を解し、古今東西の兵器、武器、戦争背景を把握している所謂戦争オタクと言うやつだ。

「今日から始業式だが・・・大丈夫かお前?だいぶ汗かいてるが。またあの夢か?」
「心配すんな。お前の暑苦しい顔を見たら落ち着いた」
「解せぬ・・・人が心配しているのに。まぁいいさ早く着替えて行くぞ。今日は、サージエストの測定もあるんだろ?」
　サージェスト・・・かつては超能力、魔術、妖術と呼ばれていたものである。研究が進みこれらの力は先天的にあらゆる生物がもつ神臓と呼ばれる内臓器官によって生み出されているものだと判明した。それまでは、神臓を持つ者は一千万人に一人の割合で生まれてきていたが、この十数年の内に爆発的に増加し今や三人に一人が神臓を持つと言われている。
「あぁそうだったな。取り敢えず食堂で飯だな、腹が減った。」
「おう!分かってるじゃねぇか。今日は色々大事な日だ、カツ丼の特盛といこうじゃねぇか!!」
　こいつ昨日の夜ラーメン大盛りとチャーハン大盛りと餃子１０個平らげてたよな・・・どこにそんな食料が消えてくんだ?

「しかし相変わらずでけぇよなここは、敷地の移動にバスだぜ?」
カツ丼の特盛を平らげた俺たちは、バスに乗って編入予定の太田南校舎へ向かう。翔の方は特盛だけでは足りないらしくデカいおにぎりを食べている掃除機か。
「東西2ｋｍ南北3ｋｍもあるんだ歩いたら結構かかるし面倒だろ」
「そうか?俺なら走って8分以内に南北横断できるぜ?」
「体力お化け・・・ん、着いたみたいだぜ行くぞ。」
何か言ったか?と睨んでくる翔をよそに俺はバスを降りる。真新しい校舎、校門から桜がトンネルをつくりその中を行き交う生徒たち
「ここが太田南校舎か。」
サージェストの為の世界最高峰の教育施設、俺たちの新しい学び舎であり、任務の場。そして。教授・・・俺の故郷を焼き払った俺の育て親が出没すると言われる場所。遅れてバスから降りてきた翔が俺に耳打ちをする。普段の暑苦しいしゃべり方やおちゃらけたしゃべり方ではない、底冷えするような威圧感のある声。
「オイ。気付いてるか?標的(ターゲット)だけじゃねぇ色々と臭いやがるぜ、普通の奴らに紛れてイカレタ臭いが。」
「あぁ気が付いてる。さぁ行くぞ」
そう、俺たちは普通の生徒として編入してきたわけじゃない。なにせ俺たちは能力を

悪用する人間に時として非合法的に制裁を加える管理人（エグゼキュター）なのだから

２幕　一端

「えーと、俺らはどこに行けばいいんだっけか」
　隣で歩く翔がいつものトーンで話しかけてくる。仕事になると人が変わったようになるが普段は結構いい奴だ・・・一人軍隊みたいな事をしなければ。
「東棟４階の第２実験室って言われてるが、ここみたいだな」
　第２実験室と書かれた扉の前で止まる。理科室のような雰囲気だがおそらくサージェスト関連の実験室なのだろう壁の掲示板には神臓に関する論文の一部や能力制御の仕組みなどのポスターが貼ってある。まずはノックっと
「失礼します、菅沢教諭はいらっしゃいますか？」
「ああ？鍵は開いてんぞ～入ってこい」
　中から気怠げな女性の声が聞こえてきた。中に入ると椅子にだらしなく座りこれまただらしなく着たスーツの上に白衣を羽織った女性が煙草を片手にパソコンを操作している。デスクの上にはファイルや資料が乱雑に積まれ、灰皿からは煙草の吸殻が溢れ出していた。だらしなく着ているスーツのせいで胸元の深い谷間がもろに見えているので結構目のやり場にこまる

「今日から編入しました九鬼です。」
「同じく二階堂翔であります！」
俺はなるべく胸元を見ないように挨拶をした、二階堂の方はビシッと敬礼までしてるここは警察学校とかじゃないから・・・
「あーあいらんいらん、事前に誰が来るか書類に目を通してるから。私が2年主任の菅沢（すがさわ）　圭司（けいじ）だ、一応お前らのクラスの担任ってことになってる。あ～男みてぇな名前だが女だからな？」
彼女はさも面倒くさそうに手を振って軽く自己紹介をした。こういう人に任せて大丈夫なのかなぁ主任・・・優秀な人なんだろうけど
「はい、よろしくお願いします。それはそうと菅沢教諭。自分たちはまだこの校舎の理事長に挨拶を済ませてなくて、統括理事長には挨拶を済ませたのですが」
「あぁ～？そうか、あのおっさん昨日まで出張だったからな。時間は・・・まだあんな。したら理事長室行ってから教室いくか」
まさかの上司をおっさん扱い、やっぱり大丈夫なのかなぁこの人・・・

「おーしここが理事長室だ覚えとけ。お前らも悪さしたらここに来るんだからなぁ、ヒ

ヒッヒ」

菅沢教諭に連れられて来た理事長室の前でなにやら物騒なことを言われたが気にしない。俺たちは扉を軽くノックし

「失礼します。編入生の九鬼　颯天です」

「同じく二階堂　翔です」

「扉は開いている入ってきたまえ」

中からバリトン声が聞こえてきた。扉を開けて中に入ると窓際のデスクで壮年の男がパソコンや資料と睨み合っていた。菅沢教諭とは逆に一切の乱れなく着こなした高級なスーツ、額に深く刻まれた皺などから厳格な雰囲気を感じさせるその風貌は男の年齢を実際より上だと思わせる。おそらくは３０代前半、この人も相当に優秀な人なのだろう。

「話は聞いている九鬼君に二階堂君だね。ようこそ太田学院ならびに太田南校舎へ、私が理事長の大森（おおもり）　隆盛（りゅうせい）だ。当校舎の理事長として２人が来るのを心待ちにしていたよ」

俺たちの前に立った理事長は、二階堂ほどの身長のうえ肩幅もありその顔と相まって凄まじい威圧感を漂わせていた。

「聞くところによると君たちは元居た学校で少し疎まれていたようだね。」

俺たちはそういう態でこの学校に編入した。

「はい、能力覚醒者が爆発的に増加したと言ってもまだまだ少ない地域もあります自分たちのいた学校では俺と二階堂だけでした。不気味に見えたのでしょうか」

俺は少しだけ自分の過去を思い出した。翔に、教授に会う前の話を

「確かにまだまだ能力を持っていない人からすれば不気味に映るのも仕方がない事だ。かく言う私も能力は持っていない。だが安心したまえ、この校舎はそういった事情を持つ生徒も少なからずいる誰も君たちを疎んだりはしないさ」

期待していると俺たちの肩に手をのせた大森理事長は口の端を僅かに上げて微笑んだ。

「はい、理事長の期待にそえるように頑張ります。」

「頑張る所存であります!!」

だからここは軍じゃねぇって・・・

「うむいい返事だ。さぁそろそろホームルームの時間だ行きなさい」

いい人だ、理事長の言葉には一遍も嘘偽りがない。本当に生徒のことを大事にしている。任務を抜きにしてこの学院での生活が楽しみになってきた。

「おーしお前ら5秒で席に着け。聞いてるやつもいるかもしんねぇがこのクラスに2人の編入生だ仲良くしてやれよ？んじゃ自己紹介だ」
　菅沢教諭に連れられて来た2年B組は何というか菅沢教諭が担任を持っているのがよくわかるほどしっかりまとまっていた。まるで軍隊だ・・・
「紹介のあった九鬼　颯天です今日から皆さんと一緒に精一杯学んで、楽しんでいこうと思うのでよろしくお願いします」
「二階堂　翔であります！得意なことはスポーツ全般おっとただの体力馬鹿と思わないで下さい？こんなりでもロシア語とドイツ語が話せます！好きな言葉はＪ・Ｆケネディで汝の敵を許せ、だがその名は決して忘れるな。得意科目は歴史であります!!」
　最後にビシッ！と敬礼までしてるよこの子・・・・・・あれでもうけてる
「はい、んなわけで九鬼はえーと右の後ろの窓際、二階堂は中列の後ろな」
　俺たちはそれぞれの席に向かう。
「よぉ待てよ菅沢せんせ。編入生が来たらお決まりがあんだろうがよ」
　唐突に一人の生徒が声を上げた。声の方に目をやると制服を着崩したガラの悪い生徒が俺たちを睨んでいた。
「あぁ？桜井よぉまたやんのか？お前もたいがいしつこいねぇ」
「あんたがこの後やる能力検査を省いてやってんだから感謝しろよ」

桜井と呼ばれた生徒は菅沢教諭にそれだけ告げると俺たちの方に向き直った。身長は俺と同じくらいか、ポケットに手をいれて睨んでくる様は一昔前のチンピラのようだちっとも怖くない。

「九鬼に二階堂だっけか?このクラスで編入生はな俺とやりあうって決まりになってんだよわかるか?」

んなもん初めて聞いたわ。とあきれる菅沢教諭を尻目に話を続ける。

「そうだなぁ・・・よし九鬼。おめぇが最初だ覚悟しとけよ」

うわっいきなり目付けられた

「やりあうってどこでやんだよ、教室や廊下じゃみんなの迷惑だ。」

「はっ!いい子ぶったことぬかしてんじゃねぇよ。外だよ外、ほれ付いて来な!」

そう言うと彼は窓から飛び出し地面に着地した。へぇ着地しても平気どころか地面に亀裂が・・・自己強化系の能力かな?

「九鬼い悪いなあの馬鹿はどうにも頭が足りなくてな、少し付き合ってやってくれ」

先生に言われちゃしょうがない俺も窓から配管と壁を伝い地面に降りる。桜井は指の関節を鳴らしながら待っている。うわぁ古っ。垂直に変化した瞳孔は自己効果系の証か

「よぉし、手加減はねぇからな?二階堂だっけか?てめぇも包帯の準備でもして待って

な」

俺だけじゃなく翔ともやるのか取り敢えずは様子見で行くか。直線的に距離を詰めて、左ジャブ・ストレート・左フック無論簡単に躱される

「オイオイ人の話聞いてたか？誰が教本通りの格闘技をやれって言ったよ？能力を使えって言ったんだ・・・よ!!」

左のローキックが俺の太ももに直撃する。かなり痛い、サージェスト能力強化によるだけのものではない、彼はそれなりに喧嘩慣れしているらしい。じゃあ左前蹴り、右膝蹴りっと・・・あれ？これも避けられた

「てめぇよ。馬鹿にしてんのか？」

桜井がイライラして様子で問いかけてくる

「いや別に、ただほらお互いに殴って怪我すんのは嫌じゃん？」

「・・・・・はぁ。もういいや最初から全力でぶん殴りに行きゃよかったんだ」

桜井が腰を落とし脱力して構える。脱力した構えとは裏腹にピリピリと殺気のようなものを感じる。

「じゃあ死ぬほど苦しいが我慢しろよ？」

一瞬だった。目の前から桜井が消え次の瞬間に腹部の強烈な痛みと共に吹っ飛ばされた。

「っ！九鬼の野郎まともに食らいやがった！」
上から見ていた女子生徒の一人がヒッ・・・と悲鳴を上げる。菅沢もこれはマズイと顔をしかめている。
「チッ止めるか・・・初日から面倒なこと起こしやがって」
止めに入ろうとする菅沢を二階堂が止めた。
「あれじゃお前の相方死ぬぞ？桜井の自己強化から放たれる音速一歩手前の蹴りはマジもんの凶器だ、間に合わなくなる前にどけ」
菅沢は一教師とは思えないほどの殺気はざわついていた空間を静まらせた。しかし二階堂は友人が危険だと思われる状況でそれでも笑いながら
「せんせ、待ってくださいよ。これからが面白いっすよ」
ホラと窓の外を指さす。彼の言う通り窓の外を見た菅沢は目を見張った、今まで倒れていた九鬼が悠然と立ち上がり服をはたいていたから、必殺の一撃を決めたはずの桜井が唖然としていたから。
「ありゃ一体・・・桜井と同じ自己強化、体を硬質化させて攻撃を無効にした？いやいやそれなら桜井の足がぶっ飛んでる筈だ。」
「いやぁキッツいなぁ中々痛かった。んでそれが一番の大技？じゃあ俺の勝ちでいいかな？」

桜井の意識は一瞬のうちに間合いを詰めた九鬼の顔面への蹴りで刈り取られた。

太田南校舎の屋上。一人の男が煙草を片手に一連の戦いを見つめていた。１７０ｃｍ前後だろうか恰幅のよい身体にスーツをピッタリと身に着けサングラスで目元を隠している。ともすると極道かそれに近しい存在とも見える。

「ふむ、やはりここにいたか」

校舎繋がる引き戸を開けた大森理事長はゆっくりと男に近付き同じように下を眺める。男はチラッと理事長を見た後スーツの内ポケットから煙草を取り出し理事長に差し出す。

「オイオイ何の冗談かね、校舎は禁煙だが？」

「フッ面白ろい冗談だな、理事長が私とここに来た時吸わなかった事は無かった気がしたが？」

そうだったか?と笑う大森理事長は既に煙草に火を付けている。
「ふむやはりこの煙草はいいな、ほのかに感じるラム酒のフレーバーが私は好きだ」
「もう１００回は聞いたよそのセリフ、んで私に用事じゃないのか?」
「そうだったな話を戻そう。してどう思う?彼を」
再び視線を下に戻した男は
「中々興味深くはあるな、ただの学生じゃあ無さそうだ。格闘技のセンスに能力はおそらく自他問わずの治癒能力増大、攻撃を受けた瞬間に超高速で破壊された箇所を修復しダメージを無効化。」
「はたから見ればまさしく不死だな」
「あれが新しい編入生、九鬼　颯天か・・・」
男は自分の携帯灰皿に煙草を落とし踵を返す。
「君はあの教室には戻らないのかい?もっとも君に研究室を与えた私が言える事では無いかもしれんが、どう思う元Ｂ組筆頭大野組長殿?」
「あぁ居心地がいいからな、それに2人もあの教室に入ったんじゃ私共の席は無いだろう?Ｂ組筆頭も何年前の事だろうな」
そう言うと男は階段を降りて行った。残された理事長は紫煙を燻らせながらこれからの事を想像する

「学院はじまって以来の大事になるやもしれんな・・・フフっ期待しているよ九鬼君」

一人呟いた理事長は自分の携帯灰皿に煙草を押し付けた。

3幕　灼陽と霊月

「九鬼の野郎中々の能力隠し持ってるじゃねぇの。なぁ二階堂よ九鬼は何か格闘技でもやってるんかい？ただの喧嘩慣れってわけでも無いだろうありゃ」

事の全容を見ていた菅沢が口を開く。

「一応趣味で色々やったらしいっすよ。ムエタイ、システマ、柔道、打撃、投げ、関節技、一通りは出来るって言ってましたね。あと先生校内は禁煙です、しかもここ教室です」

「ほぉスポーツ少年だねぇ、うん良い事だ。それにしてもうちの学年でもそこそこ戦える奏（かなた）の一撃をものともせずに仕留めるとはねぇ」

そんな会話が聞こえてくる、確かに奏（桜井　奏が名前らしい）はそれなりに強い。攻撃方法も自分の能力に合わせてしっかり考えられている、彼自身の喧嘩の腕前もそこら辺のチンピラよりかはまぁ強い。あくまでそれなりだがね、翔が行っても楽勝だったかな？

「九鬼　颯天君かね？奏相手に楽勝とは中々やるじゃないか」

突然後ろから声を掛けられる、後ろを振り返るといつの間にか2人の男が立っていた、どちらもスーツにサングラス、極道かマフィアを思わせるいでたち。1人は赤いY

シャツに黒いネクタイ、スーツと絵に描いたような極道風の男、横に広い体形がより一層貫録を醸し出している。もう1人はスーツの上に白衣を羽織ってシンプルな杖を突いているが足が不自由な感じはせずスーツの上からでもわかる筋肉質な体つきと翔に匹敵する身長でこちらも只者ではないことが想像できる。声の主は・・・どっちだろうな、赤Yシャツに黒ネクタイの方かな?それとも白衣を羽織って杖持ってる方かな

「えぇ九鬼ですあなた方は?」

　俺の問いに杖を持った男が答える

「今は知る必要はない、今日は君たちの顔を見に来ただけだからな」

「おい、輝夜。そう威圧するんじゃねぇよ確かに自己紹介は大事だ。」

　そう言うと赤Yシャツの男がサングラスを外す、白衣を羽織った男はチッと舌打ちをしつつもサングラスを外す

　菅沢教諭は彼らに見覚えがあるらしく普段は気だるげにしている目を大きく見開いている。

「朝陽に輝夜!?何故ここに・・・」

「ん?おぉ菅沢ちゃんじゃないの!ようやく担任をもてるようになったか?おっと中断してしまってすまないね、私は大野（おおの）　朝陽（あさひ）そしてこっちが・・・」

「チッ・・・鶴田（つるた）　輝夜（かぐや）だ」

そう名乗った2人はどうやら菅沢教諭とも知り合いらしい。
「先生、この方たちとはどう言う関係で？」
「そいつらは私の同期だ、太田南校舎別館にある研究室の研究員だが未だに在籍はお前たちのいる2年B組、特殊な部類の人間だ」
菅沢教諭の同期で学院の研究員でありながらB組の生徒？確かに普通ではないな。
「すまないね九鬼君、本来は編入生や新入生の力を見極めるのは我々の仕事なんだ」
「だが我々も研究や仕事の関係上中々別館を出ることが難しい、仕方なくそこで横たわっているろくでなしで妥協しているのが現状だ」
成程と納得してみたものの突如現れた2人の存在は警戒を強めるには十分だった。少なくともどちらも奏以上なのは間違いがない。
「人が寝てると思っていい気になりやがってよぉ・・・」
振り返ると気絶していた筈の奏が起き上がっていた。頭部への蹴りを食らっていながらダメージが殆ど見受けられない、結構丈夫だな
「まったく人の事をろくでなしだの何だの好き放題言いやがって、組長よ、いくらあんたでも一発ぶん殴らねぇと気がすまねぇぞ」
奏は既に戦闘態勢に入っている。先ほど俺とやった時以上に殺気を振りまいていやがる

「下がれよ奏。事実は事実だ、それに年上には敬意を払いな」
　鶴田輝夜が静かに杖を握りなおした。成程あの杖は仕込み杖か・・・本当に一般人かよ
「落ち着け輝夜。まぁ確かに言い過ぎたかもしれんしな。いいだろうその喧嘩私が買おう」
　大野朝陽がそう言ったのはスーツの上を脱ぎ捨てた直後だった。その体はやはり肥満体に見えるが脂肪の下には強靭な筋肉があることは容易に見て取れる。そしてその背中には桜吹雪の中を飛ぶ鳳凰が描かれていた。やっぱり一般人じゃねぇだろ・・・
「へっ逃げんじゃねぇぞ組長。彫り物晒してとんずらなんてしたら末代までの恥だぜ？」
「元気でよろしい、ほら来たまえ先手は譲ってやる。すまないね九鬼君、下がってくれ」
　俺は軽く頷きながら配管を伝って教室へ戻る。教室で翔と顔を合わせ外へ目をやると既に戦闘は始まっていた。
　自慢のスピードで大野朝陽の周囲を回りながら攻撃を加える奏、型も何もない打撃だが故に攻撃の軌道は不規則。しかしその場から動かず攻撃を捌き続ける大野。奏も苛立ちを隠せないのか舌打ちを続ける
「いい攻撃だ。今の学園でお前にかなう人間はそうはいないだろうな、最も今のだがな」

「っ！舐めんじゃねぇ!!」
　鈍い音と共に大野の体制が崩れる。鳩尾に強烈な打撃が決まったか、ここぞとばかりに攻撃を続ける奏。能力を使用したか・・・
「ありゃ決まったかな、あの男の能力次第だが」
　隣の翔が呟く。確かに自己強化系の能力者のあれだけのラッシュを食らえば当然只ではすまな・・・
「少し効いたな、悪くないラッシュだ。」
　大野は奏の手を掴んで体制を直す。
「あれだけの攻撃を食らっておきながら大してダメージを受けていないだと？」
「それが大野朝陽と言う男だ、元B組筆頭・・・当時は灼陽の大野、霊月の輝夜なんて例えられていた男だ」
　俺たちの疑問に菅沢教諭が答える。
「先行は終了だ、さぁ私の番だな」
　大野は一瞬で間合いを詰めると奏の襟と腕を掴む。
「大外刈りか！」
　柔道における代表的な技大外刈り。奏と大野朝陽、体重差はおそらく2倍以上だが
「させるかよ！」

体重差をものともせずに踏ん張っている、それどころか逆に１２０ｋｇはありそうな大野朝陽を押し返している。

「完璧に近いかたちで決めてきたあの大外刈りを耐えて押し返せる程なのか・・・あいつの能力は?あの体格差だぞ」

菅沢教諭も驚いたように目を見開いている。そりゃそうだどう考えても学生のできる戦闘じゃない

「まさか耐えてくるとはね、強くなったものだよ奏。だがまだまだ私のターンは始まったばかりだ」

距離をとった奏に一瞬のうちに近付き今度は打撃戦を展開する。拳、肘、膝、足途切れることの無い猛攻を何とか捌いている奏だがやはり体重差の問題か徐々に押され始めた

「柔道をバックボーンにした総合格闘技ってところか。柔道の腕もさることながらあの打撃・・・あれも長い期間を経て出来上がったものだな」

翔の言う通りあの打撃や投げは一朝一夕で身に付くものではない。今すぐに総合格闘家に転身してもいいくらいだ

「私の想定以上に粘ったね、正直驚きだよ奏。その強さに敬意を表し次の一撃で決めさせてもらう」

大野朝陽が構えを変える。柔道に戻したか・・・釣り手の肘を脇の下に入れ相手を担ぐようなあの姿勢は背負い投げか。
「無駄だっての!」
しかし奏は耐える。そのまま引き倒そうとするが
「動かない・・・だと?」
「ふっ・・・うおおおらっ!」
奏が地面に叩きつけられる音に教室の生徒が目を背ける。地面にひびが入る程の衝撃、奏は既に昏倒している。
「身体強化の能力者を投げて能力を使わずに一撃で昏倒させるとは・・・教諭あの男怪物ですか?」
「あれが灼陽の大野。警視庁の能力犯罪に対する特殊部隊通称銀の外套(シルバーコート)達から勧誘を受けていた男、怪物と言う認識は間違いではない、それと気になるから教諭はやめてくれ」
警察の特殊部隊から勧誘を受けていただと!?それならあの戦闘能力にも納得がいくし菅沢先生が驚くのも無理はない。
「朝陽。何も能力を使うことは無かっただろう。お前の腕なら最初の大外刈りの時点で決着が付いていた筈だが?」
「力を使ったのは投げる加減を調整するためだよ、奏が予想以上に強くなっていたもの

でね、あのまま投げていたらそれこそ殺してしまうところだった。」
　大野朝陽に鶴田輝夜・・・目標である教授に匹敵するほど危険な存在かも知れないな。
　その夜、俺は翔の部屋に集合した。昼間の一件で授業が無くなり早上がりとなったため校舎の周辺を探ることができた。
「どうだった翔？何か目ぼしいものはあったか？」
「いやダメだな。教授の痕跡、資料は何も無かった。その口ぶりから察するに颯天の方も収穫なしか」
「あぁ。だが一つ侵入してみる価値のある場所は在った」
「どこだ？」
「大野朝陽、鶴田輝夜のいる別館の研究所だ。あの場所にこの学院の生徒、教職員、訪問者のリストと監視カメラのデータがあるらしい」
「成程な。リストと監視カメラのデータを照らし合わせて目標を探すって事か、悪くないな。一応それも含めてあの人に報告するか」
　そう言うと翔はパソコンを起動させる。あの人とは我々管理者を取り纏める謎の人物で俺も翔も直接会ったことは無い、ただし日本のどこかで管理者越しから状況を把握し適切な指令を下している
「こちらクラーケン6とメイデンB1本部応答願う」

「ああ聞こえているよクラーケン、メイデン」
　エコーの掛かった声であの人が答える。この声とパソコン越しからでも伝わってくる重圧に毎度緊張する・・・因みにクラーケン６は俺、メイデンＢ１は翔のコードネームだ
「一日目が終わったので状況を報告します」
「続けたまえ」
「ターゲットの痕跡は確認できず、今のところは収穫ゼロです。ただ、クラーケン６が太田南校舎の別館の研究所に訪問者リストと監視カメラのデータがある事を確認したので後日潜入しようと思います。」
「成程、いい判断だと思います。他に報告はありますか?」
「それが・・・本日クラスメイトと交戦したのですが、そこに現れた人物たちが・・・」
「大野朝陽と鶴田輝夜だな。」
「ご存知なのですか?」
「ああ、２人の名前は知っているし衛星を介してその戦闘は見ていたからね。」
　管理者越しから周囲を見る事ができる上に衛星まで持っているとは・・・
「結論から言うとあの男たちは確かに危険だ、特に鶴田輝夜・・・あの男は優先ターゲットの教授、通称クエーレに匹敵する可能性がある」

「それ程ですか・・・どう対応しましょうか」
「鶴田輝夜の能力は非常に強力なものだ、一歩使い道を間違えれば国を一つ滅ぼしかねない。今は普通にしていろ、然るべき時に排除すればいい」
　国一つ滅ぼしかねない能力とは一体・・・尋ねてみたが私は保護者じゃないんだぞと教えてくれなかった。
「それから気になることが一つ。最近安桜市の学園付近において能力者が襲われる事件が度々起こっている、被害者は警察や通行人に助けられ怪我もないようだが原因不明の頭痛と鬱に似た症状を全員が訴えている。」
　通り魔的犯行か、それとも反サージェスト派による能力者への攻撃か・・・どちらにせよ能力者と一般の人とが調和する為には不必要な因子だな
「力を持つ者の為、力を持たぬ者の為イレギュラーはすべて抹消せよ。以上だ」
　そう言って通信は切れた。翔は既に仕事モードに切り替えている、俺も切り替えなければいけない、学園生活を送るのも俺たちにとっては大事なことだが任務は何も始まってすらいない

幕間　休日

「なぁ颯天。ちょっと冒険しようぜ」

　とある土曜日の朝１０時我が友二階堂翔の頭が遂におかしくなってしまったらしい。正気だった頃の最後の言葉はご飯を大盛り3杯平らげての「うめぇー」だった

「遂におかしくなってしまったか・・・ボスに連絡してお休みと良い医者を紹介してもらおうな」

「そんなわけあるか俺はいたって正常だ。任務の話だ、俺たちは学生として生活するのも任務だがこの学園に出入りしている可能性のある教授の情報を集めるのもまた任務だ。」

「それはわかっているがそれと冒険に何の関係があるんだ?」

「俺たちが今関りを持っている先生方、生徒。普段のあいつらの事はあくまで学校生活の中での一面しか見えていない。本当の普段ってやつを見てみるのも面白いじゃねぇかよ、ターゲットに関する鍵も見つかるかもしれないしな。」

　取り敢えず我が友の頭は正常に働いていたらしい、安心したよ

「成程な、しかしどうやって覗いて行く?ここは大規模な学園、昼間から怪しげな動きを

すればバレるぞ」
「ところがどっこい本部からいいものが届いてる、これだ」
　翔が持っていた袋からコートのような衣類を2着取り出した。一見何の装飾もない真っ黒なコートだが
「こいつは着用した人間を不可視にするコートだ、ただ不可視になるだけでなく赤外線や電波までスルーしてくれるらしい」
　なるほどこれが所謂光学迷彩ってやつか？数十年前まだ能力者の数が爆発的に増える前各国の軍が秘密裏に開発し少数精鋭の特殊部隊が実際に使用していたと言われている。まぁコスト的な問題や能力者の増加と共にだんだんと廃れていったらしいが、マニアがいたもんだ。
「確かに能力を探知する警報器の普及が殆どの今能力無使用の光学迷彩の方が逆に隠密性が高いって考えか・・・しかしよく本部からそんなもの届いたな」
「開発部の人間とちょっとしたコネがあってな、そいつが。君は先駆者になるんだ頼んだぞ！って言ってきたからよ！しかもあの光学迷彩だぜ？昔のゲームや映画でよく見た光学迷彩だぜ！憧れだったんだよなぁ速攻でオーケイしたぜ！」
　目をキラキラさせながら話す翔だが、それ実験台にさせられてない？先駆者って事はまだ誰も着て無いんでしょこれ、裏地は雑だし、ほつれてるとこあるんだけど・・・

「取り敢えず着てみて学園連中の様子でも見に行こうぜ！」
どうやら翔の方はこれが着たくてうずうずしているらしい。仕方がないから着るか・・・まぁバレるよりかはましだろう。袖に手を通してみると思いのほか暖かい、と言っても今は春も真っただ中、これからどんどん暖かくなっていくのにこれはちょっと暑いな、左手に付いてる何かの装置のおかげでそっちの手だけ動かしづらいし。
「左手に付いてる装置で迷彩効果のＯＮ／ＯＦＦとこれから渡すサングラスの効果の切り替えが出来るらしい。これかなっと」
おぉ確かに見えなくなった、原理のほどは不明だが光を屈折させたり背景を透過させたり色々だろうな。サングラスの効果は迷彩着用者映す効果にサーモグラフィーやナイトビジョンがセットになった暗視機能、ＣＴのようなものも付いてる。
「便利なもんだな、迷彩はともかくこのサングラスは実用的だな。」
「確かになぁでもこれ迷彩とセットじゃないと普通のサングラスらしいぞ」
やっぱり欠陥あるじゃねぇか！

大野朝陽と鶴田輝夜の場合
「じゃあお前ら仕事行ってくるから研究室の留守番頼むぞ」

「「大野組長！鶴田の頭！いってらっしゃいませ!!」」
　奏との戦いの直後現れた二人の男、菅沢先生曰く同級生で普段は研究室で研究をしている普通の人らしいけど、え？やっぱりヤクザじゃん・・・
「おい朝陽、車を待たせてる行くぞ」
　これから仕事らしい二人は校門前に止まってる高級セダン（運転手付き）に乗り込んだ。流石にアレに付いてくのはきついな、発信機でも付けておくか。俺たちは徒歩で付いて行こう
「よし颯天ここの角曲がったビル前で止まったぞ」
　広大な学園の敷地から市街地へ出て数分彼らの車が商業複合施設の一角に停まった。ん？ここのビルってアニメ専門店のビルじゃ無かったっけ？朝陽の上着に付けた発信機（盗聴器付き）からは彼らの会話が聞こえてくる
「おい朝陽仕事中だぞ、今買わなくてもいいだろ」
「いやぁ新作ＣＤは発売日に買いに行きたいじゃないか、最近のアニメやゲームは実際の声優さんが劇やったり活動してたりするからすごいんだって、今日は俺の推しのキャラの声優さんが来てたしよ」
「まったく・・・そんなヤクザみたいな姿でレジの列に並ぶのは流石にどうかと思うぞ？」
「そう言うお前もそんな目立つ格好でゲームの予約してたじゃねぇかよ。知ってんだぞ

？予約してたのがＦＰＳゲームに挟んだ乙女ゲームとギャルゲーだったのを。コスプレか何かかと思われてたぞ？」

「うるせぇな・・・」

仲いいなあの二人、花柄のスーツを着た恰幅のいい男が声優さんのいるレジに並んで、桜吹雪柄の和服を着て杖を着いた長身の男がギャルゲーと乙女ゲームの予約ねぇ想像しただけで面白いな、翔にいたっては地面叩いて大笑いしてるし。おっここからは歩いて移動か

「着いたみたいだな、朝陽取引を確認しておけよ？」

「あぁ、こっちの研究結果を提供する代わりに研究用の薬品、材料と機材の提供。それなりにデカい取引になるな」

ビル中に入って行く二人を追いかけて俺たちもビルに入る。このビルは能力研究の機材や材料を取り扱うビルらしい研究員らしき人たちの姿も見える

「初めまして、太田南大野研究室代表の大野朝陽です。」

「同じく鶴田輝夜です」

取引をする二人は見た目はともかく話術や細かい数量の交渉はそこいらの営業マンより高いスキルが窺える。オタク趣味全開だったさっきの場面が嘘のようだ

「それではこの条件で取引をさせて頂きます。少ない時間を割いて頂き感謝します。」

「こちらの研究室で提供して欲しい研究結果を確認次第ファイルを添付したメールを送らせていただきますので確認後に材料をよろしくお願いします」
　取引が終わったようだ。相手方も満足な内容だったらしく笑顔で取引を終えていた
「よし何とか良い取引にできたな。輝夜ここからのスケジュールは?」
「今日はこの一件のみだな、研究室に戻って報告書作って後はフリーだ」
　二人が歩いて車に戻ろうとした時路地の裏から微かに助けを求める声が聞こえた。
「・・・おい朝陽聞こえたか?」
「あぁスケジュール追加だ、行くぞ」
　あの二人も行くのか
「ねぇねぇお姉さんこれから暇でしょ?俺らに付き合ってよぉ～」
「そうそうこれから俺たちいいとこ行くんだけどさぁ花が少なくてさぁ、お姉さんいいっすよねぇ」
「あ、や、やめて・・・下さい・・・」
　路地を進んだ先ビルとビルの間の空き地でスーツ姿の女性が数人の男に絡まれていた。男たちは金髪だったりジャラジャラとネックレスやピアスを付けていたり如何にもと言うようなチンピラ達。奏を更に悪化させたらああいう風なるのかねぇ
「大丈夫だってお姉さんも絶対楽しいからさ!行こうぜ」

「ちょ、痛っ！」
「あーちょっと失礼お兄さん方、彼女痛がってるみたいだから離してあげたらどうだ？」
少し現場を眺めていた朝陽が流石にと思ったのか近付いて声を掛けた。ここは彼らのやり方を見守るとするか、翔も同じ考えらしく現場を傍観している
「ええとあんたら何？この子の知り合いか何か？今俺たちが誘ってるんだから邪魔しないで貰えるかな？」
「そうそう、痛い目にあいたくないならどっかに行ってくれるかな？」
あからさまな敵意を向けるチンピラ達に怯むことなくそれどころか、はぁ・・・とため息を付く朝陽の代わりに輝夜が前に出る
「その言葉そっくりそのまま返すぜ？痛い目見たくないなら彼女を離して回れ右でもしておうちに帰りな」
「うぜぇなお前ら、オイこいつらボコってお駄賃でも貰おうぜ？」
チンピラ達は落ちているパイプやら角材やらを持って二人を取り囲む。おぉ結構いたんだな
「ひぃふぅみぃよ・・・一人頭四人ってとこか、輝夜いけるか？」
「秒だろ秒」
軽口を叩きながら上着を脱ぎ捨て素肌を晒す二人にチンピラ達の方が怯む。それも

そうだ２人とも背中に彫り物してるんだもん。朝陽の桜吹雪と鳳凰も凄いが更に目立つのは輝夜の方だ、細く見える体とは対照的な鍛え上げられた筋肉、背中には月に吠える純白の虎と漆黒の狼の和彫り、左の腕には螺旋状に絡み合うトライバル柄の蛇、右の胸には梅に交差した日本刀と全身刺青だらけ。

「舐めやがってこの野郎・・・ぶっ殺せ！」

武器を持った八人対二人、無謀にも程がある戦い、彼らを知らない者が見れば結果は火を見るより明らかだが俺たちからすれば逆の意味で結果は明白だった。

「あーあぁ馬鹿な奴ら」

まさに災害、朝陽自慢の剛拳を食らえば枯葉のように人が飛び、ぶん投げられた奴は壁にひびが入る勢いで叩きつけられる。輝夜も剣に見立てた杖を剣豪も真っ青なレベルで振るう。あっという間にリーダー格の男を残してチンピラ達は全滅。台風みたいだな

「おい朝陽、ちょっと遅いんじゃねぇか？俺のが先に片付いたぞ」

「いやいや変わらねぇって秒だよ秒。さてそれはそうとまだやるかい？金髪の兄ちゃん」

朝陽がリーダー格の男に向き直った瞬間２人の間を何かが高速で通過しコンクリートの壁に突き刺さった。鉄パイプか・・・？

「舐めんじゃなねぇよ！お前らなんて俺一人でも十分だ！」
　気が付けば落ちていたパイプや角材などが男の周りを漂っている。アレは・・・
「チッ・・・Ｐ（サイコキネシス）Ｋか」
Ｐ（サイコキネシス）Ｋ・・・念力や観念動力などの呼び方がある超能力の一種。自らの意思で物質を動かす力をさす。それほど珍しい能力では無いが、ほぼ全ての物を動かせること、専門の能力者程では無いにしろ炎や水なども動かせる事など汎用性が高く軍や警察の能力者部隊では優先的に採用しその総数も身体強化と並び最も多い能力の１つ。
「流石にパイプでぶっ刺せば死ぬだろ・・・？だったら死ねや！」
「うるせぇ」
　だがそれが彼らの体を貫くより速く輝夜の杖が男の意識を刈り取った。輝夜と男の間には１０ｍ近い距離があったが距離を詰めたのと杖で突いたのが同時だった。だが距離を詰めた動作はまったく見えなかった。唯一分かることは輝夜の立っていた位置から一直線に伸びた何かが焦げたような黒い線だけ
「は、速い！おい颯天アレは・・・」
「あぁ全く見えなかった、瞬間移動か身体強化か、見当がつかん」
　あれが鶴田輝夜・・・あの人が警戒するだけの事はある。
「お疲れ輝夜。いやぁお前がいて助かったよ」

「嘘付くな、俺がいなくてもお前一人で何とかなっただろ」
「んなことねぇよっと、さてさてお嬢さん大丈夫でしたか?」
　そんな会話している二人、朝陽が座り込んでいる女性を起こそうと手を伸ばす。が彼女はその手を振り払う。
「触らないで!助けてもらった事は感謝するけど、貴方達能力者でしょ?化け物風情にこれ以上気を使われるなんて御免だわ!」
　そう叫んだ彼女の言葉がその場にいた四人に重くのしかかる。
　化け物か・・・超能力等の類がサージェストと定義付けられ３０年程経ち能力者の数も多くなってきたが今尚能力者を化け物や怪物と称しその存在を忌み嫌う者は多い。１０年ほど前には能力者肯定派と否定派で大規模な抗争があった程だ。
「わかったわかった、我々はもう行きますからそんなに怒らないで」
　朝陽は気にしていないように振舞っているが、手を出さないように必死なのだろう翔の方も怒りを露わにしている
「輝夜行くぞ俺たちの役目は終わりだ」
「なぁ一つ聞いていいか」
　去り際に輝夜が立ち上がった女性に問いかける。背を向けたままただ冷たく
「お前は、お前の子供にも同じことを言うのか?」

そう言うと輝夜は足早に路地を後にした。朝陽も「お気をつけて」と一言だけ言って輝夜を追いかける。

「化け物か、なぁ翔お前は能力者に付いてどう思うよ」

「変わらねぇよお前と、彼らも同じ人さ化け物なんかじゃねぇ。でも人が自分とは異なるものを毛嫌いするのもまた事実だ、だから争いは止まないって事だろう、俺だったらあの女表の通りまでぶっ飛ばしてるところだ。」

報われない人助け。善意が必ずしも感謝されるとは限らない、それどころか敵意を向けられる事さえある。ともあれ俺たちは再び研究室に戻る二人を追いかける。勿論徒歩で

「輝夜、よく手出さなかったな。」

「お前もな、だが流石に我慢できなくてな、つい問いかけちまったが・・・」

「いいだろうよ、まだまだ時間はかかるだろうがいつか互いに分かり合える日が来るさ」

大野朝陽は能力否定派に歩み寄ろうと努力している、やり方は地味でも少しずつ研究を通して争いを無くそうとしている。鶴田輝夜は言葉は冷たいがそれはある種の悲しみなのかもしれない。親によって捨てられる能力を持って生れて来た子供、中には泣く泣く子供を手放す親もいる。そんな悲しみを彼は無くしたいのかもしれない。

「あの二人の論文あったぞ、能力の暴走と安全性それからサージェストの生誕とその不

可逆性、朝陽の方は本も出してる。能力者との争いとその果てだとさ」

部屋に戻った後翔がスマートフォンで彼らの論文と本を見つけて来た。理事長や彼らのように肯定派と否定派の懸け橋になるようなそんな人たちが増えていけばいいと思った休日だった。

4幕　聖女

「てことで話を纏めると、人間の脳から出る信号を神臓がキャッチ、神臓はキャッチされた信号をもとに能力を発現させると言う事になる。ただしこの神臓がどのようにして超自然的な現象を発現させるのかはよくわかってない。」

転校初日から数日が経過し段々と学校生活と言うものに慣れてきた。この学校は一般的な学校で行われる教科に能力に関する授業を加えた専門学校の高等科のような体制を取っている。今の授業はサージェスト基礎、能力の概要や発現のしかた等を勉強する。担当者は我らが担任菅沢圭司、普段の不良教師っぷりが１８０度反転飛び級でここの高等課程を卒業しこの学園の教職に就いたとも噂されるその実力を遺憾なく発揮している。

「まぁ研究にでも携わらないなら小難しい用語はパスして簡単に覚えちまえばいい、どうせ使う機会なんてねぇしな。さてちょっと寄り道して豆知識だ、能力は一人に付き発現する能力は一つだが例外的に二つ以上能力を持つ人間がいる、わかる奴いるか？じゃあ、二階堂・・・は寝てんのかポンコツだな、じゃあ飯塚」

先生は積極的に生徒を指名していくスタイルの授業のようで雑学もふんだんに盛り

込んでくる。隣でスヤスヤと気持ち良さそうに寝ている翔を冷たい目で一瞥して更に前の飯塚楓さん（確か発火能力（パイロキネシス）だったかな）を指名する。

「はい、えーと固有の能力ではなく多数の超自然現象を一つの能力として発現させる所謂魔法使いと言われる人たちっすか？」

「その通りよく勉強してるな、まぁ正解は半分だな補足するならもうひとパターン人間がいる。実際に確認されたことは今のところないが多重能力者とか言われているな、基本的な能力発生経路は同じだが二つ以上の力が扱える。この多重能力者の存在を否定する研究者も多いが私的にはいると思っている、存在を示唆した文献もいくつかある。」

多重能力者・・・確かに魔法使いではないが複数の能力を扱う人間は文献上存在しているのだが実際に確認はされていないし存在すると言う確固たる研究結果もない。が俺は多重能力者を一人知っている、彼女は美しく聡明で誰よりも誇り高く義を貫く人だった、俺たちの標的そしてかつての育て親・・・

「彩月さん・・・」

「おーい颯天聞いてるか？」

「え？は、はい」

突然の呼びかけに声が上擦ってしまった、恥ずかしいなぁ。どうやら菅沢先生が声を掛けたようで不思議そうに俺の顔を覗いている

「いや普段真面目に授業聞いてるお前が授業終わったのに窓の外見てボケェっとしてるからよ、ちゃんと私の聞いてたか？試験に落ちても知らんぞ」

幸いノートは取っていたので大丈夫ですとだけ言っておいた。

「ならいいんだが。あぁそうだ他の奴にも言ったが校外に飯食いに行くなら気を付けろよ？通り魔事件が多発してるからな」

あぁ確かボスからそんな話は聞いたな。菅沢先生はそれだけ言うとさっさと行ってしまった。

「おーい颯天飯行くか？」

今度は翔か、さっきまでグウスカ寝てたのに飯の時には起きるんだな。因みにこの学園規模がデカいだけあって食堂が複数存在するしチェーン店や喫茶店も敷地内にあるうえに届け出を出せば校外にも昼食を取りに行ける。

「そうするか、今日はどこ行くかな」

「お、いたいた。翔ビックニュースだ！」

どこの食堂に行くかを悩んでいた時、がたいの良い連中が集まってきた。なんかすげぇ暑苦しい・・・確か野球部、水泳部、ラグビー部、空手部、サッカー部だったか？

「お、どうしたお前ら」

「いや、第二食堂の隣に元この学園の歴史学講師がやってるラーメン屋があるんだけど

よ、歴史のクイズに三問答えたらラーメン特盛とから揚げ丼付けてくれるらしいだがやたらと問題が難しいんだ。そこで翔の出番ってことで呼びに来たんだ」
「なぁそれって一人で答えて全員分無料になるのか？」
　盛り上がってるところに水を差すようだが思わず突っ込んでしまった。
「あ！そっかぁ・・・まぁなんとかなるだろ」
「成程・・・行くしかないな！紀元前から最近の時事までどんな問題でも答えてやるよ！って事ですまん颯天いいか？」
「あ、あぁ行ってこい俺はそんなに食えん」
「よしそうと決まれば行くぞ！もちろんお前ら替え玉は頼むよな？」
　暑苦しい連中はワイワイと余計に暑苦しくなって去っていった。てか特盛食べた後に替え玉頼んでから揚げ丼食うのか・・・しかしおかげで今日の昼食は一人になってしまった。どこに行こうかを再び悩んでいた時に携帯が鳴った。この携帯は隊員の連絡用？俺は校舎を出て人いないところに移動した
「はい、こちらクラーケン６」
「お、クラーケン６か丁度いいや、俺だジズだ」
　ジズ、俺や翔が所属する実際に現場に出て犯罪者や標的と交戦する部隊のトップで管理者になったばかりの頃の上官でもある、普段はずぼらな人だが確かな実力を持ってい

る。

「お久しぶりです上官。何かあったんですか?」

「おいおい上官はやめてくれよ俺だってもうそんな大層なもんじゃないって、今やお前ら若い奴の方が上官みたいなもんだろ。まぁ本題に戻るが、俺は今別件で安桜市にいるんだが標的であるクレーエを繁華街で見つけた。お前らが追ってるんだろう?」

クレーエ!やはりこの街にいたか

「繁華街の裏路地に入っていくのまでは追えたんだがそこで見失った。近くに潜伏先があるのかもな、座標を送っておくから引き続き頑張れよ俺たち年寄りがサボれるようにな!」

ありがとうございますと言って携帯を切る。ついに教授に追い付いた、今度こそあの時集落を捨てすべてを焼き払った理由を問い詰めてやる。

「・・・取り敢えず飯食わなきゃな」

しかし通信を他の生徒に聞かれないためとは言え随分端の方に来てしまった。この辺に飲食店か食堂あるかな

「ん?喫茶店カメリア・・・こんな校舎の端っこに喫茶店があるもんなのか。ここでいいか」

こんな隅にも喫茶店があるのも不思議なものだが入ってみれば隠れた名店かもしれ

ないし。扉を押すとカランカランと扉に付けられた鐘が音を立てる。席はカウンター席のみの小さなものだが、多種多様な植物にあえて汚したり壊れたように配置されたアンティーク品や壁と退廃的だがどこか幻想的な雰囲気すらある店内。壁の防音材が気になるけど悪くないなこういうお店

「はーいいらっしゃい。カウンター席しかないけどいいかな？」

奥から一人の女性が顔を出す。歳は俺と大して変わらないように見える、今どきの服装にすらっとした足は不自由なようで杖を突いている。まずは席に座ろうかな

「お客さん初めましてだね、私は百合川（ゆりかわ）　芽亜（めあ）ここのマスターだよ。」

「初めまして今月からこの学園に転入した2年B組の九鬼　颯天です。」

「転入生君かあ。どうりで学園内でも見た事ないわけだ。今2年って事は私の三つ下かな？後輩君だぁ」

どうやら芽亜先輩は二年前に学園を卒業してそのままこの場所で喫茶店を開いたらしい。色々面白い話も聞けそうだから取り敢えずパスタと紅茶を頼んだ

「芽亜先輩はどうして進学や企業に行かずに喫茶店を？」

「んーまぁ私は在学中はやんちゃだったからね、それにここで他の生徒の悩みを聞きながらアドバイスしてそれでその人の気持ちがスッキリしてくれればこっちも頑張ったなって実感わくじゃない」

「とてもやんちゃしてたようには見えないですけど・・・でもその気持ちとてもカッコいいです」
「あはは、とか言ってあんまりお客さん来ないんだけどね。ほいできたよ」
　出てきたパスタはアサリやイカ、エビなどが入った所謂ペスカトーレで綺麗な盛り付けのそれはレストランで出てくる品のようでとても美味しそうだ。
「すげぇ・・・」
「そんなにすごい物じゃないって、紅茶はアッサムだよん」
　一口食べても同じような感想しか出てこない、それ程美味しい
「あはは、そんなにガッツかなくってもいいって気に入ってもらえたなら嬉しいけどさ」
　無心でパスタにガッツいているとカランカランと鐘がなった。お客さんかな？
「あ、いらっしゃい。お客さんいるけどいつものとこ座りなよ」
「そうするよ芽亜姉」
　ん？この声どこかで・・・横を向くと見覚えのある着崩した制服、ところどこに見える応急処置の跡、向こうも俺の顔に覚えがあるようであからさまに嫌な顔をしている。
「颯天・・・こんなところで何やってんだ」
「よう、奏元気か？」
　櫻井　奏、転入初日に喧嘩を吹っかけて来た不良生徒、俺と大野朝陽両名にボコられ

たがそれなりの実力とタフネスさは認めるよ
「あれ二人とも知り合い？あ、そうか二人ともB組か。ん？って事は奏あんた喧嘩したの颯天君でしょ」
　奏は、ばつが悪いようで言葉を詰まらせた後そうだよとだけ答えた。芽亜先輩の前だと随分大人しいんだな
「奏ぁあんたはねぇ、他の生徒に突っかかるのは止めなさいっていつも言ってるでしょ？」
「けどよぉ芽亜姉・・・」
「言い訳無用！」
　芽亜先輩に小突かれ小さくなる奏。すげぇなあの奏を抑え込んでる、その時三度扉の鐘が鳴る
「いらっしゃ・・・あら井上さんお久しぶりね今お茶出すから少し待っててもらえます？」
　入ってきた四十代程の男はスーツ姿で一見教師のようにも見えるが眼鏡の奥の切れ目はただただ冷たくその雰囲気も一般人とは違う。この男中々強いな、いくつもの修羅場を潜り抜けて来た精強さが伺える。
「お久しぶりですね芽亜さん、手短に済ませますのでどうぞお気遣いなく。それでどうです？我々ピュニーアとして仕事をする件考えてくれましたか？」

ピュニーアか、俺たち管理者と同じく能力犯罪者の鎮圧を生業にする組織。その筋では結構な老舗で実力も高いと聞く。
「オイ、芽亜姉はその件何度も断ってるんだろ？しつこいってよ」
お、奏が噛みついたな。さっき小突かれて大人しくなったのにこいつもこいつだな
「奏か。私は芽亜さんとの交渉中だ口を挟まないでくれるかな？そこの学生君も同じくね。君達じゃ力が足りていない」
ピュニーアは実力者を厳選して組織としている、時には強引な手を使っても隊員を集めてるらしい。奏は何も言い返せずに男を睨んでいる。まぁそいつ強いけど気にすることは無いと思うぞ奏、大野組長よりは弱いし。俺の正体に気が付けない時点である程度の察しが付く。うん紅茶が旨い
「ごめんなさいね井上さん、私はまだまだこの店でやることがあるの。私の実力を認めてくれてるのはありがたく思うわ」
でもねっと一旦言葉を切った芽亜先輩の狂気じみた笑顔と空気を震わせるような殺気にカップを落としそうになる。こりゃまたとんでもない殺気・・・これがやんちゃしてたってレベルか？
「私の大事な弟分の奏、それに今日初めて会ったけど後輩君を無意味に貶めるのなら私だって容赦はないわよ？」

　ピュニーアの男も額に汗を浮かべ口ごもってしまう。当然だこれ程の殺気、今まで戦ってきた能力者ですら中々いないぞ、それこそ四方を戦車に囲まれたような気さえしてくる。
「血の雨を降らせる聖女、その実力は健在か・・・しかし芽亜さんあなたの実力は力なき者の為にも必要なのですよ」
「わかっているわ井上さん、でも私はまだこの店で仕事をしていたいの、それに今私は杖を突かないと歩くのもままならない身体よ？そんなのが組織にいたとしても足手まといになるだけでしょ？」
　ここまで言われてしまえばあの男も何も言い返せないようでうつむいて汗をぬぐっている。
「さぁこの話はこれでお終い。井上さんも何か食べて行って、ささやかなお詫びよ」
「あ、あぁそれじゃコーヒーとトーストを頼む」
「かしこまりました！それじゃ気分ぶち上げるから曲かけるわよ？」
　俺とピュニーアの男は首を傾げ奏は何かを察したような顔で耳を塞ぐ。芽亜先輩がスイッチを入れた瞬間に店内に重く強烈なバスドラムの音が流れ始める。防音材はハードコアを流すためか！うっ腹に響く・・・

「ってわけで校舎の端っこにある喫茶店中々よかったぞ、料理も美味いし」
午後の授業を終え寮に帰ってきた俺たちはいつもの通りどちらかの部屋に固まる、今日は俺の部屋だ。
「へぇ颯天がそこまで言うほどの店か、今度俺も行ってみるかな。んでその芽亜さんとやら何者なんだ?」
「わからん、ただとんでもない実力者って事だけは想像が付く・・・そう言えば聖女とか言われてたな」
「ん?それって血の雨を降らせる聖女ってやつか?」
「あぁそれだそれだ、何か知ってるのか?」
うーんと少し考えたのちに翔はゆっくりと口を開いた。
「今日一緒に飯食った連中に空手部の奴がいたんだが、そいつの兄貴がここの卒業生らしくてな、なんでも3～4年前そいつの兄貴が一年生の頃の話だ。当時学校内で名実共に最強と言われていた三年生の灼陽と霊月つまり朝陽と輝夜だな、その二人に喧嘩売ろうなんて奴は当然ながらいなかったわけだ。だがそれ以上に恐れられていた女子生徒が血の雨を降らせる聖女と呼ばれてたって話だ。」
「あの二人以上にか・・・にわかには信じられん話だがな」
「それだけじゃねぇ噂によると・・・」

翔が何かを言いかけたその時、ピピピっと呼び出し音が流れる。アレ？、また隊員の連絡用携帯だ珍しいな一日に二回もかかってくるなんてしかもテレビ通話だ
「はい、クラーケン６です。」
「おうクラーケン度々悪いなジスだ」
画面の向こうにはよく知った女性の顔が
「お、上官じゃねえっすかお久しぶりっすメイデンＢ１っす」
翔が身を乗り出して画面に手を振る。
「おう、メイデンもいたのか久し振りだな。丁度いい仕事の話だ」
仕事、そう聞いた途端に翔の顔から笑顔が消える俺もおそらく似たような顔をしているんだろう。
「ふふっ良い顔つきじゃねぇかよ。内容をそちらに送る確認してくれ」
部屋にある受信機から内容の書かれた紙が送られてくる。因みにうちらの組織は紙媒体で情報を伝えることが多い。確かに燃やしてしまえば情報は洩れないし便利と言えば便利だがもっとほかの手段があると思うんだけどなぁ・・・んで肝心の内容の方はっと
・依頼人　ジズ
・依頼内容　安桜市及び学園周辺で発生した通り魔事件の解決

・条件　実行者の捕縛または粛清

「折角同じ地域にいるんだ明日は休みだろう？詳しい内容は会って話そうじゃないか。０９：００に駅にて落ち合おう通信終わり。」

「だそうだ翔。この学園に来て初めての依頼だ準備でもしとこうや」

俺は任務用の服や武器等が入ったバックをベッドの下から取り出す。翔はすでに黙々と武器の整備、分解を始めている。

「そういやさっきの噂ってのは結局何なんだ？」

「ん、あぁその芽亜ってのは喧嘩で数々の男達を血祭りに上げ噂が間違いじゃなければ在学中に一人殺っちまってるってだけの話だ・・・」

仕事モードの翔が言った言葉に開いた口が塞がらない、あの芽亜先輩が・・・？

5幕　発端

安桜市はもともと小さな街だ古くは城下町として栄え軍都としての歴史も持つ。江戸時代には西洋医学の街としても知られていた、その為能力開発の拠点を決める際首都から近く広大な土地を持つ安桜市が有力候補地として名前が挙がったとか。今では学校が能力開発、教育の中心部として駅の周辺は大型商業施設や飲食店が立ち並び能力開発の仕事に付く人々や学生の寮やマンションが建設され続けるなど街の巨大化はとどまるところを知らないようである。

駅前の繁華街を抜け街灯もまばらになった夜道を私飯塚　楓は急ぎ足で歩く。夜道は好きじゃない、普段通りなれたこの道も昼とは全く違う顔を見せる。昼間は猫の溜まり場になっているそこの路地も今は永遠に続く異界への入口のように感じる。街灯によって出来た私の影は私とは違う意思を持ち今にも襲い掛かってきそうな気さえしてくる。

「はぁ、とっとと帰ろ」

まだ季節は春後半、冬に比べて日が延びて来たとは言え17時を過ぎれば辺りは薄暗くなってくる。大会の近い私達陸上部は新入部員歓迎会も合わさって学校を出たのは

6時を回っていた。県大会ひいては全国大会に繋がる大会なのはわかるが生徒が襲われた事件があったというのにうちの学校も呑気なもんだと思う。襲われた3年生も悪いうわさが目立つ人だったがそれでも自分たちの学校の生徒が襲われたんだから早めに返すのが普通なんじゃないかと友人と話していた。私は発火能力を持ってるから襲われても大丈夫と友人には豪語したもののやっぱり怖いものは怖い。

「はぁ、敷地内の寮がよかったなあ……」

本日2度目のため息を吐く。学園指定の寮は敷地内と繁華街を抜けた住宅地の2ヶ所に存在する。学園の敷地内にある寮は、買い物や出掛けるには不便だが防犯や通学の面から大学生や他県から来ている学生に非常に人気がある。一方こちらは駅は近くショッピングモールも歩けばすぐと生活には便利だが通学には多少時間がかかるうえにかなり割安とは言え家賃も払わなければいけない。

「はぁ……敷地内は家賃ないのになぁ」

今日は何んだかため息が多い。生活面で、勉学の面で、近々訪れる大会、部員の関係、家族、友人、金銭、全てにイライラする。

こんな生活に、理解できない授業に、伸び悩む記録に、形だけ所属している部員との温度差が、特異な力を持った私を遠ざけた両親が、今日のあいつの態度が、学費と生活費に消えていく金銭が、憎らしい、羨ましい、妬ましい、なんで？　どうして？　壊し

たい、殺したい。

殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……アレ？

「はぁ、はぁ、はぁ、なン……でこんナニイライラシテルノ？」

あまりの息苦しさに思わず倒れこむ。あれは溜息なんかじゃ無かったんだ、ぼんやりと薄れていく意識の中そんなことを考えていた。

「おやすみ……たしの……かわ……生徒」

誰？　かすれて声になったかどうかもわからない声で目の前に現れたソレに尋ねた、しかしソレは何も言わずに路地裏の闇に溶けて行った。何だか聞いたことのある声だったような気がする確か……声の主を思い出す前に私の意識は限界を迎えた。

暦は皐月へと変わり桜の木も緑色へと染まりつつある早朝の休日、俺は鏡の前で身なりを整えながら翔を待っていた。

「この服……傍から見ればただのコスプレだよなぁ危ない系の」

黒のスーツにひれのようなプリーツ（折り目）、右肩の肩章と腕に鉄十字の紋章、制帽の

トーテンコッ(髑髏)プと完全にナチス・ドイツの制服を模したスーツ。任務にあたる時の制服を決める際翔に一任したの少し後悔している。あいつがミリタリーヲタクなのは知ってたがまさかここまでやるとは……

「Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ！　準備できたか颯天」

ドアの向こうで危ない服を俺に支給した本人が騒いでいる、毎度毎度元気なものだと感心するよ。俺は今行くと告げ机の上にある最早化石と言っても過言では無いポリマーフレーム拳銃ＶＰ７０を胸にしまい一枚の写真に目をやる。白に近い金髪に青みがかった瞳はどこか神秘的で近寄りがたい雰囲気だが、柔和な表情と幼い俺を抱き寄せる腕はどこまでも優しかったのを覚えている。姉であり、保護者であり、そして俺がこの世界に足を踏み入れるきっかけを作った因縁の相手、任務に向かう際は彼女に何か語り掛けるのが俺のルーティンになっていた。

「行ってくるぜ姉さん。今度こそあんたから事の真相を聞き出してやるさ」

ドアを開けると見慣れた浅黒い肌のガタイのいい男が一人、この制服を仕入れて来た張本人二階堂　翔が同じくナチス・ドイツ仕様のスーツをキッチリ着こなし満面の笑みを浮かべて待っていた。この男相変わらず残念な趣味嗜好の持ち主ではあるが悔しいことに彫りの深い顔立ちにガッチリした体つきがミリタリー系の服や制服とマッチしていた。

「Ｈａｌｌｏ中々似合ってるじゃん」
「お前には勝てねぇよ」
「まぁそう言うなって、それよりジズから朝一で連絡が来た、駅前に来いってさ」
　俺たちは言われた通り駅に向かうため学園初のバスに乗り込む。この学園何といっても小学校から大学キャンパスにいたるまで十数の校舎と学生寮、研究施設からなる広大な敷地なので区画ごとにバスが行き来している俺たちはＢブロックっと
「んで颯天はどう思う」
「どう思うとは？」
　デカいおにぎりを頬張りながら隣の翔が意味ありげに問いかけて来た、てかそのおにぎりおかしくね？　なんで顔とサイズが変わらないの？　なんで唐揚げが二つ丸々入ってんの？
「通り魔の話だよ、千人規模の学生がいる中、能力者を集めた俺らの南校舎の学生が狙われた。ただの偶然かそれとも作為的な何かか」
「現段階じゃ何とも言えないなぁ被害にあった生徒自身が悪い噂の絶えない人物だったみたいだし、第一に通り魔事件なのかどうかすら怪しいところではあるだろう」
　そう、この一件は夜の繁華街を出歩いていた彼女が偶々狙われたものなのかそれとも最初から彼女を狙った計画性のある犯行なのか確信に足る情報が少なすぎる、ジズに

会ってもう少し情報を集めねば。そうこうしているうちに終点のバス停に到着した。各駅停車から有料特急まで停まる駅、隣接したショッピングモール、立ち並ぶ多種多様な店舗、休日は家族連れ等で賑わいを見せる筈の繁華街だが……様子がおかしい。

「なんだ？　あの規制線はよ」

翔が指す先には黄色いテープが張られ両端に二人の警察官、数人の野次馬とただならぬ事態であることは容易に想像が付く。

「いったい何事ですか？」

翔が警察官の一人に声を掛ける。こう言う時に物怖じせずに話しかけに行くのはだいたい翔だ、物怖じせずにとは言ったが遠慮がないだけである。ほら見てみろこんな服着てるから怪訝そうな顔してるじゃん、ネオナチだと思われるわ。

「あ、あぁまた太田学園の生徒が襲われたそうだ。これで二件目になるな」

俺と翔は顔を見合わせる。素行の悪い生徒が巻き込まれた偶発的な事件かと思ったが、こうなってしまっては偶然とは言えないだろうこれは能力者を狙った事件で間違いない。

「現場を見せてもらうことはできませんかね？」

「ダメだダメだ。一般人は立ち入り禁止だ、そうじゃなくても怪しいあんたらを入れる訳にはいかんよ」

そらそうですよねぇ……こんな危ない二人組じゃねぇ……

「あー入れてやれ、そいつら俺の客だ」

俺たちは後ろから掛けられた声に同時に振り返る。よれよれのスーツを着た大柄な中年の男は、規制線の前に警察官に指示を出す。

「さ、佐々木警部……いやしかし……まぁ貴方のお連れ様ならどうぞ」

「悪いねぇ連絡不足で、さてお前ら付いて来な」

こんな知り合いはいた記憶は無いが現場を見られるならまぁいいか。俺たちは男の後に続き事件現場に入る。

「捜査一課能力犯罪担当の佐々木だわりぃけど席外してもらえるか？」

佐々木と名乗った男は現場の捜査官達に声を掛ける。捜査官達は刑事と一緒に入って来た俺達を訝しんでいるが渋々と現場から出ていく。

「さて、久し振りだな颯天、翔」

「あー誰かと思ったらジズか、相変わらず訳わからん人だなぁ最後に会った時は女子大生じゃなかったっけ？　と言うか昨日の通信じゃ女だったろ」

この男？　組織で五本の指に数えられる猛者で潜入任務の達人なのだが会う度に性別どころか骨格から変わるためいまいち実態が掴めない人物、通称ジズ俺達の上司だ。

「アレお前らには言ってなかったか、こっちが表での仕事なんだよ」

刑事でありながら裏社会では能力犯罪者の抹殺や破壊工作もしている、合法的にも非合法的にも対応できてる訳ね抜け目ないねぇ。
「まぁ適当にその辺見て回れや。ガイシャは太田学園南校舎二年B組飯塚　楓、明け方通りかかった住民の通報で発見された、外傷は無し、争った跡も無し、ただし頭痛と軽い鬱に近い症状が確認されてるって言ったところだな」
「おーい！　ジズ、颯天これなんだと思う？」
翔が何か見つけたみたいだな、ん？　なんだこれ、ブロック塀が煤けてるな一部にいたっては変色してる、変色の度合いから見てだいたい６００℃から７００℃ってとこか
「確か楓さんの能力ってパイロキネシスだったよな」
「あぁ、ただコンクリートを変色させるほどの炎を出せた記憶は無いな、第一に争った形跡が無いにも関わらずここまで派手に能力を使うのもおかしな話だ」
結局この日はたいした収穫も無いままジズと別れることにした、あれ以上現場にいても何も得られないだろうからなあの場はジズと警察に任せることにしよう。
「どうする翔、だいぶ時間ができたが、たまには買い物でもするか？」
「お、いいねぇ。丁度買いたいものあるし」
と言う訳で俺達はハンバーガーチェーン店でコーヒーとハンバーガーの朝メニューで時間を潰すことにした。店員のお姉さんは俺たち二人を見て当然の様に危ないもの

を見るような目で見てきたがもう気にしない。
「あれ後輩君じゃん？　やっほー」
　聞いたことのある声がしたのでそちらを向くとこちらに向かって手を振る女性が一人。スラっとした手足が流行りのファッションによく似合う、だがそれ以上に目立つ杖をついた彼女は……
「芽亜先輩奇遇ですね、買い物ですか？」
「そうそう食材とか色々ね、そっちは友達？」
「はじめまして二階堂　翔っす。こいつとはまぁ古い馴染みみたいなもんです」
　彼女を見て一瞬仕事モードの目付きになったがすぐにいつものおちゃらけモードを取り戻す。この辺りは流石だなもう結構打ち解けてる感じだしな
「そっかーじゃあ翔君も私の後輩だ。あ、そうだよかったら三人で見て回らない？　二人ともこっちに来たばっかりでしょ私が案内してあげる」
「いいですねぇ行きましょう！」
　やっぱりこいつは人と打ち解けるのがはやいな。まぁ買い物は人数が多い方が楽しいし。
「じゃあ行こっか」
　芽亜先輩はだいぶここで買い物慣れしているのかショッピングモール内の案内が非

常に的確だった。気に入った店も何店かあったし、翔にいたってはミリタリー関連の服や小物の店のスタッフと早速意気投合して連絡先まで交換してたもんなぁ。お、このパーカーかっこいいし動きやすそう。

「いやぁしかし休日だけあってフードコートはいっぱいだねぇ」

休日のフードコートは家族連れやおそらく学生と思われるグループでごった返していた。芽亜先輩は席を探してくると行って先に行ってしまったので俺達は入り口で待機することにした。子供の手を引いてそそくさと俺達から離れていく親御さん達を見ると心が痛む……アレ何？　とか言って指ささないで……

「しかし、血濡れの聖女の噂は吹かしじゃなかったんだな」

急に仕事モードになった翔がボソっと呟く。

「お前は何がわかった？」

「足に異常があるがそれを感じさせない歩行、隠しちゃいるがあの拳殴りなれしてる、細く見えるが足の方も相当に鍛えてる。足に異常があって尚当時と同じ戦闘力があるとすればその技術は教わる価値があるな」

確かに彼女が戦ってる姿を見たわけでは無いが今でも当時と同じ強さを有しているなら、負傷時や動きを限定された場面での戦闘技術の向上に役立つのは間違いない。二人してうーんと唸っているうちに芽亜先輩からメッセージが届いた。席見つけたって

さ

「芽亜先輩、今日の夜学校の屋上に来てもらえませんか？」

最初に切り出したのは翔だった。

「え？　やだなぁ翔くんもう私に惚れたの？　まいったなあ今そういうの募集してないんだけどなあ」

「いやそう言う訳じゃ……俺達の仕事とでも言った方がいいですかね」

「ふーん成程……そう言う事ね」

芽亜先輩の顔から笑顔が消えた……それと同時に彼女の内側から得体のしれない気配がふつふつと湧き上がってくる。これだよ、この気配、俺より更に殺しに長けている翔でさえ冷や汗を流す程の圧倒的闘気とても高校を卒業して間もない女性のそれでは無いな。

「まぁいいよ、今晩ねわかったわ。何をするのか楽しみにしてるわ」

じゃあねと去っていく比較的小柄な筈の彼女の後姿はいやに大きく見えた。暫く無言だった俺達は重圧から解放され大きく息を吐く。これは万全の準備をしていかないとな。互いに頷きあい寮へと戻り準備を始める、今彼女と争うつもりは無いが万が一に備えねば。

そして夜が訪れる……

太田学園は小高い丘の上にある。その為校舎の屋上は街を見渡せるある種の絶景スポットだった。この時間でも親御さん達の部活やらなんやらで学校は開いていたりするので侵入は簡単だった。ナチス・ドイツ風の軍服にマントを羽織り顔を隠した男二人が夜の学校に侵入、見つかれば大ごとだがそこは俺達の腕の見せ所だ、誰にも見られず忍び込めた……筈

「綺麗なもんだなメイデン」

「まったくだ。出来ることならさっさと終わらせること終わらせて卒業まで平和に過ごしたい。そう思っちまうよ」

「本当よねこの景色、私も学生時代躓いた時はよくここに来たっけ」

来てくれたか。芽亜先輩は昼間とは打って変わってスウェットにパーカーと動きやすさ重視の格好、杖も昼間とは形状が違うな。

「さてどこから話していいのかまずは俺達の目的から話すよ」

「あーストップ。いやぁごめんね一人で来る予定だったんだけど……見つかっちゃった☆」

舌を出しておどけて見せた彼女の後ろ屋上への入り口から大柄な男が現れた。

「芽亜下がりなさい」

「いや理事長、さっきから言ってるけど私に危害が及ぶような話じゃ無いんだってば、

おーい聞いてる？」
　太田南校舎の理事長、大森　隆盛この人が出て来るとは予想外だったなぁ……
「ここは俺が行くぜクラーケン、荒事にはしたくなかったが少し眠っててもらう」
　メイデンこと翔が右手を三本貫手にして前に出る。一瞬光ったソレは麻酔針か、荒事にはしたくないなんてよく言うよ準備万端じゃねぇか。念のため俺もスーツの中の銃に手を掛けるゴム弾仕様だが動きを止めるには十分だ、この距離じゃまず外さない。
「強いな……だが今更後にも引けまい。さぁ掛かってくるといい」
　理事長が構えを取ろうとした瞬間翔が動いた。靴を顔面へ飛ばして目潰しに使い麻酔針を仕込ませた貫手でブスリ、並みの奴なら終いだな
「……!?」
　へぇダッキングで躱したか、理事長もそれなりの腕はあるのか。しかし翔の様子がおかしい……
「お、おいこいつはやべぇぞ」
　そこまで言うと口元を抑えせき込み始めた、その口元は血で染まっている。反撃？あの一瞬で？　いやそもそもあの至近距離から翔を吐血させるほど一撃を？　理事長はスーツを脱ぎ捨てワイシャツの袖を捲くる。
「うーんやはり鈍ってるか、ウエイトを増やしてみたがまた鍛えなおしか」

やっぱり理事長はなんらかの格闘技を相当やってるみたいだな、初めて会った時から妙にガタイがいいとは思ったが。下がって来た翔が俺の耳元で呟く

「はあ……はあ……当たったぜ颯天、どっかで見たことあると思ったんだ。あの左フックで完全に思い出した、間違いねぇあいつはボクシング世界王者だ！」

6幕　泥梨

「世界王者？　あの体格だと結構重量級じゃねぇか、ミドル級より上って王者いないんじゃなかったっけ？」

「お前は興味の薄い事はホントに調べないのな……とにかく、南雲（みぐも）　隆盛（りゅうせい）って男が１２年ほど前に世界の座に挑戦した。１８８ｃｍ。ライトヘビー級の平均的な身長より少しデカいかってとこだが判定勝ちの多いアウトボクサーで周囲の評価はあんまりいいもんじゃなかった」

「何でだよ？　アウトボクサーのフットワークやパンチの技術は見てるだけでも芸術の域だと思うんだが」

　極まったアウトボクサーはインファイトを得意とする選手を抑え込むことも多いのだとか。相手の距離を保ちながら確実に体力を削ぎ落し頃合いを見て強烈なパンチで相手を仕留める、ボクサー崩れの奴らには何度も苦戦させられたもんだ。

「そりゃそうだが人間てのは判定勝ちの試合より劇的な試合が見たいんだよ、リング外の消費者はド派手に殴り合うインファイターが好きなのさ。んで南雲は周囲の期待と反してベルトを賭けたその試合で至近距離からの強烈なラッシュで勝負を決めちまっ

た。さっき俺が食らったダッキングからのボディフック、相手の視界から雷の如く消え去り槍とまで称される一撃で数多の強豪を沈めてきた、人呼んで『雷槍』ニックネームにもなってる奴の必殺技だ」

「随分詳しいな。私の自己紹介がほとんど済まされてしまったよ、嬉しいものだよまだファンがいたとはね」

理事長は嬉しそうに手首を回しながらまだかまだかと言わんばかりに俺達を待っている。翔のダメージもデカいそうだしここは俺が出るか？　一歩踏み出そうとした俺を翔が制する。

「突然の引退宣言から１０年か、面白れぇ……下がってろクラーケンこいつは俺が喰うぜ」

翔は小声で俺に告げるとゆっくりと立ち上がり口元を拭うとダラリと下げた腕をコンパクトに構えなおす。オイオイあいつボクシング世界王者にボクシングで挑むつもりかよ!?　構えを取った両者の間にヒリつくような闘気が漂っている。先に動いたのは翔。高速ジャブからのボクサー顔負けのコンビネーション、しかし相手はチャンプそう簡単に攻撃は通らない。重量級とは思えない機動力と同じくらいの体格の翔をガードごと軽々弾き飛ばすパンチ力、徐々に翔が押され始めた。

「どうした？　後手に回っていては前へは進めんぞ」

「わかってるって、うるせぇなぁ。やっぱ単純な殴り合いじゃ勝てねぇか……」
攻撃を躱していたいた翔がだんだんと攻撃を捌き始めたそして
「むっ!?」
気が付けば翔の拳を肘を理事長が躱している、アレは――回天――か受けから攻めへ瞬時に転じる、並みの人間なら倒される寸前まで攻守が入れ替わった事すら気付けない翔の得意技だ。異変に気が付き反撃を試みた理事長も流石は元世界王者と言ったところかしかしアレの前では抵抗も虚しいところか。目突きを躱した理事長の体勢が崩れた、それを見逃す翔では無い。
「これで詰みだ」
あの体勢からじゃ翔の拳は躱せねぇな、けど大丈夫か、殺しかねない勢いなんだが加減してんのかあれ?
「あ、やべっ」
顔面を狙った翔の拳が空を切る。攻撃に合わせて脱力、上半身を地面スレスレまで下げて躱したってのか!? そしてその体勢から満を持して世界を捻じ伏せたボディフック(槍雷)! あんな避け方して倒れるどころか攻撃に繋げられるなんて一体どんな身体してんだよ……いくらなんでもあのフックを二発ももらうのはマズイぞ!
「なに……?」

最高のタイミングで攻撃を仕掛けた筈の理事長が片膝立ちのような形に体勢を崩す。翔の方は雷槍を軽く押さえているだけ、あいつまた新しい技を身に着けたのか？

「あぶねぇ、咄嗟の思い付きだったが何とかなったぜ。――Ｃ６Ｎ――とでもしておくか」

Ｃ６Ｎ……大日本帝国海軍の偵察機彩雲かあいつらしい名前だな。驚きに硬直していた理事長が何か理解したかのようにスッと顔を上げる

「力の向きか……してやられたな」

そうか、雷槍の力を捻じ曲げて体勢を崩したのか。翔のあの技は身体能力の強化によるものでは無い、身体能力の強化はあくまで能力の副産物に過ぎない。翔の真の能力はざっくりと言えば力の操作、地面を蹴れば一流のスプリンターを抜き去り、殴れば金属を叩き折る攻撃力を発揮する。自分にかかる力しか操作できないと翔は言っていたが触れたものの力も操作できるようになったのか、やるじゃん。

体勢の崩れた理事長の頭部へ蹴りを放つ翔、すぐさま体勢を立て直し右ストレートで迎え撃つ理事長、どちらも必殺の一撃。

「はい二人ともそこまで」

激突の瞬間二人の間に割って入った影が一つ。屋上の柵に腰掛けて戦いを見守っていた芽亜先輩が二人の一撃を受け流し或いは受け止めるようにして戦闘を終わらせる。

「もう充分。これ以上やると怪我じゃ済まないよ？　翔君も後輩君もここまでやったんだしバラしちゃいなよ正体」

自分より遥かに体格の良い二人の一撃を事も無げに捌くとは、この人やっぱり……。やれやれと言った様な感じで理事長は早々に拳を引っ込める。しかし翔の方はいまいち納得のいかないご様子。

「どいてくれねぇか先輩？　王者と手合わせの機会なんてそうそうある訳ねぇもう少し楽しませてくれよ」

あーあーまた始まったよ翔の〝悪い病気〟が。夢中になるとすぐ目的を忘れるんだから困ったもんだ。流石に止めに入ろうとした時連絡用の携帯から通知音が鳴る、発信者はジズか、画面には【折り返せ】？　少しやな予感を感じつつダイヤルを回す。

「あぁクラーケンか、すまないね急に」

数コール後に聞こえてきたのは聞き慣れない女性の声。アレ番号間違えた？　いや発信者名タップすればその番号に繋がるんだからそんなことは無いはず。

「あの……えーと、ジズから折り返せとの事だったのですが……」

「あん？　何言ってんだ、ジズはあたしだぞ？　勉強のしすぎで脳味噌溶けたか？」

あ、本人でした。いやそうじゃ無くて、なんでものの数時間前まで無精髭のしかも野太い声の大男だったのにこうなるんだ……俺の知っているジスは今のところ俺たちを

育て上げたズボラで胡散臭いが確かな実力を持つ上官、無精髭を生やした大柄な刑事、女子大生だった事もあるな。そして今電話の向こうのハスキーボイスの女性、全部同一人物だってのか？　訳がわからん。

「あんた実はキ○グギド○みたいに頭が三つあったりするのか？　それかダ○か……」

「そんな三ツ首の怪物やら宇宙の怪人と一緒にしないでくれる？　まぁそれはいいとして、メイデンも一緒？」

一緒は一緒なんだが……と後ろを振り返る。予想通りと言うか何と言うか、未だにチンピラの様に睨む翔と臆する事なく睨み返しているものの乱れた服装を整える理事長、二人をどうにか御する芽亜先輩。すみませんねうちのおバカが。

「何でもいいが今から本部まで来てくれる？　そっちに車はまわしておいたから」

んじゃと一方的に通信を切られてしまったが。ええ……本部に召集か、俺達何かやらかしたか？　取り敢えずまだ理事長に食い付こうとしてるおバカを下がらせて本部に向かうとしよう。理事長と芽亜先輩には後日きちんと話をすると言う事でその場を収めて車に向かう。

車に揺られる事約一時間。ＩＴ企業が立ちならび在日大使館、大規模な商業エリアや高級住宅街までを擁する日本経済の一翼を担う港区。その一角の高級住宅街白金台に

俺達『管理人』の本部はある。
「久し振りに来たな。運ちゃんありがとさん」
　とある二十階建高層マンションのエントランスに車を停めて貰いお礼を言って俺達は車を降りる。ここまで運んでくれたおじいちゃん運転手は柔らかい笑顔で一礼して去って行った。ファミリー層の多いこの住宅街も九時を過ぎればだいぶ静かになる、それはこのマンションも同じ。エントランスから待合スペースを通りエレベーターホールへ向かう。
「慣れねぇな、広い、豪華でそして高い。（値段が）ブルジョワジーの住まいってのはよ」
　翔がそうボヤく。まぁ確かにこいつは物置小屋みたいな空間の方がかえって落ち着くとか言ってたしな。実際にこいつの部屋は野戦服やら武器やら、俺には到底理解できんような外国の戦術指南書やらが散乱してて凄い事になってる、何度銃やらなんやらに足を取られて転びかけた事か。ただ大事な物は桐のタンスに仕舞っているらしくそれらの物が出しっぱなして言うのは見たことない。
「まぁわからんでも無いけどさ、やっぱり少し憧れるよな。こう言う高級マンションに所帯を持ってのも」
「家庭を築くか、俺にはわからねぇな。親の顔も知らねぇし唯一一緒に生活してた妹も死んじまってるしな」

やべぇ、地雷踏み抜いた……児童養護施設で知り合った俺達は互いの過去をあんまり詮索しないようにしてたから知らなかったとは言えこれにはかける言葉が思い付かん。

さて微妙な空気のままエレベーターホールに到着っと。さて全部で六基あるエレベーターはどれが本部へと繋がる正解でしょう……答えは全部ハズレだ。俺はホール中央、幾何学模様の床にＩＤをかざす。ピッと微かな電子音と共に床の模様が鈍く光る。次の瞬間俺達は無機質な壁の前にいた。

「おー着いた着いた」

マンション地下数百ｍ、東京都の地下に広がる迷路、東京メトロの合間を縫って造られた俺達管理人の本部、通称『泥梨（ないり）』核弾頭をも防ぐ奈落の扉。その扉にそれぞれのＩＤをかざしパスワードを打ち込む。アレ、パスワード何だっけ？　確か数字とアルファベットで……

１２３４５ｊｐ違うな、０９８７６ｊｐ違う、暗号化されてたっけ？　１１：６５：７１：５３：２４（アホマヌケ）いや違うなぁ……

「おーい、はやくしろよー」

「待ってろって、えーと……」

生年月日逆から足して年齢掛けて４４２ＪＰこれだろ！　『オカエリナサイマセ、クラーケン０６、メイデンＢ１』合成音声と共に重たい扉がゆっくりと開く。扉の向こう

は奈落を意味する名に反して白い天井に輝く床。暫く廊下を歩くと翔が口を開く。
「ここ苦手なんだよな、なんっうか白すぎると言うか明るすぎると言うか、泥梨ってのは奈落だか地獄だかの意味だろ？」
「付け加えるならサンスクリット語のＮｉｒａｙａを音写したもの、奈落もＮａｒａｋａとして同義語と言われているわ。思ってたよりも早かったわね二人とも」
　廊下の曲がり角、白い壁に寄り掛かって俺たちを待っていたのは、パンツスタイルがよく似合う中性的な美女。スラッとした長い手足、引き締まったモデルばりの体型、青が混ざったような黒いウルフカットがその中性的な顔立ちによく似合う。ひょっとすれば男性モデルよりイケメンなこの美女、本来なら俺の知り合いリストにはいない、いや実際にはいないと言っても良いんだが。この声には覚えがある。
「で、急な呼び出しってなんですかね？　ジ・ズ・さん」
　そう。俺たちの教官だった男、今朝方事件現場にいたゴツい刑事、通称ジズ。８人いる管理人幹部の一人で管理人全体で見ても１、２を争う実力者。後ろで「お、知り合いか？」と茶化していた翔が口が床につくような勢いで大口開けてフリーズしたのが容易に想像できる。わかる、わかるぞ翔。今朝まで筋骨隆々の中年男だったのがものの数時間で宝〇歌劇団で男役が務まりそうな美女に大変身したんだものな明智探偵もびっくりだろうよ。

「主宰様がクラーケン、お前にと前々から話していたの。丁度供物との連絡会も近かったしパートナーのメイデンも一緒に来てもらったってわけ」
「供物か……3人ほど別格の幹部がいるって噂は聞いた事がある。8人いる幹部の中でその3人だけは、特定の任務の為国を離れてるって話だ」
「うん、噂程度の話もよく取り込んでるわね。まぁこんな所で立ち話してても仕方ないわね。こっちよ」
　ジズの後を追って白い廊下を更に奥へと進む。何度か泥梨には来たことはあるけど、ここまで奥まで来たのは初めてだな。知らない部署をいくつか超えて着いたのは小さなエレベーター……と言うより荷物用昇降機って言うんだろうなこれ。
「上がるわよお前たち。屋上よ」
「テレポートで地下に来たのにか？　だったら上のエレベーターとかテレポートでも良かったんじゃね？」
「屋上へ行くエレベーターは地下にしか存在しなしテレポートで侵入しようとしても別の座標に跳ぶように細工が施してあるの。警備、防犯の為にね」
　そう言うジズの後について俺たちもエレベーターに乗り込む。3人が乗るとこのエレベーター非常に狭い、肩幅の広い翔が邪魔なので俺たち二人で身を乗り出すようなだいぶ無理な姿勢になる。1分ほど屋上を目指して揺られ俺の太ももが限界を迎えよう

とした時、エレベーターが止まった。開いた扉から倒れ込むようにして外に出る。産まれたての子鹿のような足を押さえて顔を上げると、そこには泥梨以上に異様な空間が広がっていた。

「なんだ……これ？」

時計の長針は２２時を少し過ぎた事を表しているが、頭上からは真夏のような陽射しがカッと照りつけている。まだ薄ら寒い外とは対照的な汗ばむような、纏わりつくような気温。本当に同じマンションの屋上なのか？　ここは

「オイオイ、マンションの屋上じゃねぇだろ。見ろよ、アロエにサボテン、ベンケイソウ、これはハマミズナか。どれも乾燥地帯の所謂多肉植物ってやつだな。それにこの屋上の様式……」

翔もこの屋上の異様さに気が付いたか。雲一つない空に浮かぶ太陽（？）に肌に突き刺さるような乾いた気温、多種多様な多肉植物、張り巡らされた水路や噴水を見るとスペインからインドにかけて影響を及ぼしたペルシャ式庭園を意識したものだろうか？

しかし暫く歩いて噴水を超えた辺りから段々と植えてある植物が松や桜に替わりはじめた、それに合わせて周りの風景も池や砂利を中心とした日本庭園に変化してきた。

「今度は日本庭園か。ごちゃごちゃしてて訳がわかんなくなってきた」

「それは俺も思ってたわ、しかもさっきまで和風の庭園だったのがもう変わってるぜ、中

国庭園かこりゃ？　まさにカオス」

確かによく見るとここは木や珍しい形の岩をふんだんにに使い一つの世界を表しているようにも見える。混沌とした場所だが、それぞれを一つの庭園として見れば素晴らしい景観ではあるし、気分転換の場所にはもってこいなんだろう。橋の下では色とりどりのニシキゴイが餌をくれと言わんばかりに水面に集まってきている。お、あの赤黒の奴はデカいな1メートルくらいある。

「なぁジズぅいつになったらボスの部屋に着くんだ？　もう結構歩いてるぜ」

翔がぼやくのも無理はない。もう既にエレベーターを降りてから１０分は歩いてる、いくら大型の建物と言っても一棟のマンションの屋上としては明らかに不自然だ。それにこの庭園……明らかに屋上の面積よりデカい。池も水路も下の階に影響のある深さにみえる。

「もうすぐだ。ほら見えてきたぞ」

ジズが指差す方向を見て俺はまた頭が痛くなって来た。いやこれだけ訳の分からない景観なんだ、何がきてももう驚くまいとは思っていたが。和風な庭園の中に不自然に建つ洋風の建造物、大袈裟な曲線を描く屋根、過剰とも言える程に施された装飾や色、豪華絢爛をそのまま体現したかのような装いに反して側面や裏側は非常に簡素な作りしている。

「最後はバロック建築と来たもんだ。どうやらここの住人はカオスな空間がお好みらしい。なぁ颯天」
「ホントにな。ツッコミ疲れるよこれじゃ」
　そう言いながら俺たちはジズの後に付いて中へと入る。思った通りと言うか見た目通りと言うか内装も豪華そのもので、天井に大きく描かれた騙し絵は実際の高さ以上の空間を演出し、床に描かれた星空によってまるで宇宙空間にいるような気分になる。
「さぁここが主宰様の部屋よ」
　ジスが開けた扉の向こうは、何と言うか椅子のない礼拝堂とも言うべき空間だった。ここも派手なステンドグラスや絵画、芸術など他の場所と遜色ないような派手な空間に仕上がっている。部屋には既に3人、壁に寄りかかって腕を組んでいる男、テーブルでお茶会を開いてる女性が2人。どれも歴戦の猛者だって事が雰囲気から容易に想像が付く。壁に寄りかかっていた男は俺達の方に向き直り口を開く。
「よっしゃ揃ったな。それじゃ連絡会を始めますかねぇ」